

## 第20回ミツバチ科学研究会 に参加して

鈴木 勲

玉川学園駅に降り立った。2, 3日前に降った大雪が、道の両側に所々、積まれていた。溶けかかった雪のかたまりに、油煙が黒く輪となり汚れている。雪解けの水が絶えず道路に流れ出て、路面を濡らしている。底冷えする線路沿いのだらだら坂を登り、学園に入る。

工学部前の建学の碑の前の池では、勢いよく噴水が水を吹き上げ、まだら模様の水面を作っていた。真白く綿帽子をかぶった植木と共に、美しい景観を作っている。左側斜面の松林の根本からは、青い下草が息吹いて見えた。

左右の雪景色を見ながら、会場へ向かう。同行の末次氏は雪国育ちの故に、スタスタと歩く。暖国育ちの私にはすべてが珍しく、キョロキョロ左右を賞でながら歩調を合わせる。

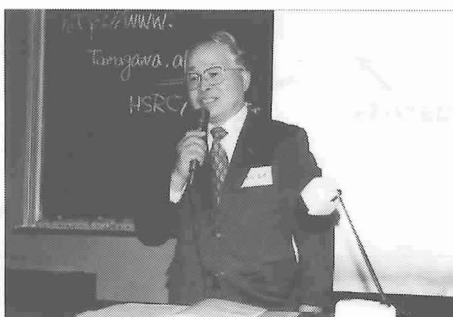
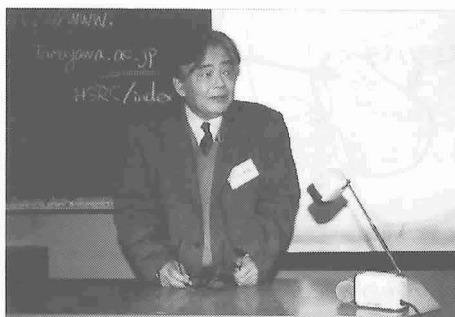
会場で受付を済ます。ロビーには、見慣れた何人かがそれぞれのグループごとに輪を作り話し合っていた。まず会場を覗く。間近の入口に岡田先生、酒井先生が座っておられた。

挨拶を済ませて着席する。渡された資料に目を通して、養蜂家の参加が多いのに気付く。午後の特別講演が、私たちに特別な関心事である演題で、養蜂家の出席が多いように思えた。開

会15分前位、見慣れた人たちが続々と入場してきた。午前の部の研究発表は、藤原瑞永君・秋田県の故・藤原敏夫様の孫、ご両親はじめ熟知の人々だけに、特別な親近感と思い入れがあり、頼もしく、嬉しく聞かせてもらった。研究発表は、ミツバチの互いの役割についての研究であり、大変参考になるよい発表であった。二人目の伊藤充さんの発表も、実験室内の観察ながら、野外で通常に行われている生態系を実証するもので、とても興味が持てた。中村、松香両先生のアピモンディア、アジア養蜂研究協会についての一般報告のあと、昼食を済ませて、午後の特別講演に入った。

特別講演の一部は、「畜産生物科学研究所」の吐山豊秋先生の「ミツバチ腐蛆病防除に有効な薬物の探索」のテーマで、我々養蜂家の最大の難問である腐蛆病に対して、予防・治療の効力を持ちかつ生産物（ハチミツ）等に残留しないという非常に難しい問題に取り組まれた。「家畜伝染病予防法」の厳しい制約を受けながら、片方では食品衛生法の規約による制約も受けるという困難な状況の中で研究を進めていただき、ミツバチの病気治療と養蜂生産物への残留のない薬の研究に専念され、二つの条件を満たした有効薬剤を特定されたという。発表は、我々養蜂家に大変な光明を与えてくれた。

今後の日本の養蜂業界にとって計り知れない貢献がもたらされることだろう。参加した多くの養蜂家に希望と夢を与えてくださったご苦労に対しては、感謝の言葉もない。まだまだこれからいろいろと難題の出ることとも思うが、今日発表にあったいろいろの試験結果を基にし



講演中の吐山氏（左）と渡辺氏

て、各種の規制をパスして、実用の段階が一日も早く来ることを望むものである。

特別講演第2部は、渡辺英男先生の「ミツバチ関連業の特集」のテーマで、アピモンディア養蜂経済担当理事の先生のお話であった。世界的な視点と広範な知識、実践の中から養蜂業の将来と、自然環境のあり方を説かれた。行政や、他力への異存でなく、業者が手を取り合って自主努力で業界の発展に取り組まなくてはならないと、切々と説かれていた。

昨年京都では自然環境京都会議が開かれ、世界的規模で環境への見直しや反省も行われたことは、自然環境を唯一の生産基盤とする我々養蜂業者にとっては、ようやく一筋の光の見え始めたことと考えられる。それらの反省がなければ、人類に未来はないのではないだろうか。渡辺さんの説くWADDの思想は、経済問題だけにとどまらず、南北問題でもなく、現在と未来への継承の思想であり、基の視点にそった話には説得力があり、本当に胸に響くお話であった。講演が終わったとたん、県から出席していた養蜂家の一人が飛んできて、「今度県の総会

では是非もう一度話を聞きたい。頼んでくれ。」と頼みに来た。ちょうど来合わせた渡辺さんに話し快く承諾を得た。県ではさらに、続きをわかりやすく話してもらうことにする。久しぶりの研究会参加で、多くの知友に会えた。それぞれに健康を祝し、親睦を深めることが出来たことは、非常に喜ばしかった。混沌とした世相は相変わらず先行きの不透明を秘めているが、久しぶりにあった人々は皆元気で明るかったのがまた、今後への励みにもなった。特に、今日の研究会では腐蝕病に対する講演を聴いて養蜂業界の難問に明るい兆しが見えたことは、本当に嬉しいことである。

懇親会では、思いがけず乾杯の音頭を取る光栄に浴して、感謝の気持ちでいっぱいである。肥後君の暖かい心遣いも感じられ、忘れ得ぬ一日であった。昨年の天候は晴雨交互に申し分なく過ぎて、暖冬気味の昨今はレンゲやミカンの木の生育を促している。蜂飼いの宿命か、今年の豊作を祈念して筆を置く。

(〒424-0874 清水市今泉 89-6

農事組合法人クキンビーガーデン養蜂組合)

## 展示会「蜂は職人・デザイナー」

標記のタイトルのユニークな展示会がINAXギャラリーで開かれた。蜂の巣は、素材面では泥、植物の葉、パルプ、ヤニ、ワックス、造形面では壺型から六角形まで、と変化に富んでおり、それぞれに機能美を誇っている。これらが洗練された展示空間に効果的な照明を得て、標本でありながら息づいて見える。中でもキオビホオナガズメバチの巣（玉川大学所蔵）は、まさに和紙で作った芸術品という感じで、紙の発明のヒントになったことをうなずかせるし、オオスズメバチに勝るとも劣らない体格の巨大アシナガバチの巣（三重大学所蔵）はそれだけでも一見の価値がある。

一方、これを機に出版された同名の本（INAX出版、次号で紹介予定）も、生物学のみならず、古来からヒトがこれらの構造物に注目



スズメバチ、ミツバチ…各種の巣が並ぶ壮観な展示してきた歴史にも触れ、見逃せないものとなっている。大西成明氏による巣の写真が美しい。  
(佐々木正己)

東京での開催は終了、大阪（6月9日～8月22日、電話 06-539-3518）、名古屋（9月8日～11月22日、電話 052-201-1716）の各INAXギャラリーにて開催（詳細は各会場へ）。